

『現実と信仰のはざま』井上隆晶牧師

Ⅱペトロ1：16～21、ヨハネによる福音書4章43～53節

①【低く、謙虚にならなければ】

イエス様は「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」（44節）といわれました。子どもの頃から知っているので、その知識がじゃまになり、本当の姿が分からなくなるからです。しかし、イエス様がガリラヤに着くと、ガリラヤの人たちはイエス様を大歓迎しました。それは彼らがエルサレムでイエス様の奇跡を見たからです。「奇跡」それは、偏見のある人たちをさえ認めさせる力あるものです。でも奇跡からはたして信仰が生まれるのでしょうか？紅海が二つに分かれ、エジプト軍から救われるという大きな奇跡を体験したイスラエルは簡単にそれを忘れ、神から離れました。カルトから救われる奇跡を体験した人の内、信仰を持つのはわずか10%です。人々が求めているのは信仰ではありません。救いではなく癒しであり、神ではなくこの世の物なのです。

さて、イエス様はガリラヤのカナに行かれました。そこは昔、水をぶどう酒に変えた奇跡がおこなわれた場所です。カナの人々もまたイエス様が何か不思議な奇跡を見せてくれるのではないかと期待していたのではないかと思います。そこへカファルナウムに住む王の役人がやってきました。彼の息子が病気で死にかかっていたからです。カファルナウムはガリラヤ湖畔にある大きな町であり、ここからカナまで32kmくらいあります。けっこうな道のりです。聖書は「カファルナウムまで下ってきて息子をいやしてくださいのように頼んだ。」(47節)と書いています。カファルナウムは大きな町であり、カナは田舎です。普通は「上ってきて」ですが、彼は「下ってきて」と頼んでいます。自分が低くなっているのが分かります。救いのために必要なことは、自分を低くすることです。キリストは、低い所におられます。彼と出会いたければ、降りなければなりません。ザアカイの様に、ナアマンのように降りるのです。聖書を読む時もそうです。上から見下すのではなく、下から仰ぐのです。見下すとは「ああ、聞いた聞いた、知っている」という態度です。そうではなく、少年サムエルのように「お話してください、僕は聞いております」というのです。僕として自分に言われた命令だと思って聞くのです。聞いたことを忘れず、それを実践するのです。それが神の言葉を聞く態度です。

②【神の言葉を軽んじてはならない】

そんな彼にイエス様は「私が行って癒してあげよう」とは言われませんでした。他の人にはそのように言われた時もありますが、ここでは「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない。」(48節)と言われ、彼に先に信仰を求められました。しかし彼には、信仰の話などしている余裕はありません。

必死です。「主よ、子供が死なないうちに、おいでください。」(49 節)と頼みます。それでも、イエス様は動こうとされず、行こうとなさいません。そして一言だけ「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」(50 節)と言われます。イエス様がどこまでも信仰を求められているのが分かります。聖書は「その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。」(50 節)と書いています。イエス様の言葉には何の保障もありません。しるしもあります。しかし彼は信じて家に帰って行ったのです。何か肩の力が抜けたように感じます。信じるというのはこういうことなのです。「力づくで、何としても」というのは肩に力が入っていますから、信じることにはなりません。そのような人は、「イエス様なんてあてにならん」と腹を立て、他の神々や他の人の所に走ったりするでしょう。信じるとは自分の思いを通そうとすることではなく、キリストの思いを受け入れることです。

しかし、家に帰って行く途中で、僕たちが迎えに来て、子供が活着ていることを告げられます。そこで息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは「きのうの午後 1 時に熱が下がりました」と言いました。聖書は「イエスが『あなたの息子は生きる』と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。そして彼もその家族もこぞって信じた。」(53 節)と感動的な言葉で結んでいます。ここにも「信じた」(53 節)と出てきます。「信じて帰って行き」(50 節)また信じたのです。信仰がだんだん深くなってゆくのが分かります。

私たちは、神の言葉というものを軽く扱い、軽い気持ちで聞いています。しかし神の言葉というのは、一度発せられたら必ずその通りになるのものです。神の言葉は永遠に活着ているからです。人は言葉だけでは心細い、物足りないといい、目に見える確かなしるしが欲しいといひます。しかし、キリストは自分の言葉がいかに力があるかを教えられたのです。カナにいても、カファルナウムにいても、どこにいても彼の言葉は有効であり、どこでも彼の目は見ておられ、どこでも彼の手は働いています。全地のどこにおいても、キリストの支配をまぬがれるものはいないのです。

③【現実と信仰のはざま】

私たちは常に「現実」と「信仰」のはざまに立って活着ています。はざまというのは「間」という意味です。

●日本キリスト教団の良さは、いろんな教師たちがおり、いろんな出会いが出来るということです。大阪だけで 138 の教会、伝道所がありますから、教師たちも 140 名以上います。今まで私もいろんな教師と出会い、助けられ、教えられました。先日、人事部委員会である先生が「教会に 50 名いた信徒がどんどん減って行き、20 名になったら牧師は鬱になるよね」と言われたので、私はこう言いました。「一度、落ちるところまで落ちたら怖くなくなります。落ちないように中途半端だから鬱になるのです。人間の力で何とかしようとして守りに入っているのが今の教団、教会の問題です。一度、潰れたらいいんです。落ちる所まで落ちたら神様に頼るしかないじゃあないですか。神に祈ったら、不思議なことが起こるのです。」

神の業を見れます。その方が面白いのです。人間の業が終わった時から、神は働きます。」これは私の経験を言ったのです。あるキリスト教系の季刊誌を読んだのですが、神様の文字が一つも出てきません。まるで共産党の新聞を読んでいるようです。確かに正しい知識と情報を伝えてくれるので、知らなかったことを知ることができるのは良いことなのですが、**読めば読むほど、お先真っ暗になり、心は重たくなってくるのです。**それを人事部の時に、先ほどの先生に言ったのです。彼は東北教区と西東京教区で社会委員会の委員長をされたことがあります。彼が言うには、**社会委員会もいっしょだと言うのです。社会の悪を裁き、政府を糾弾し、社会の問題を追及する事だけをしていると、聞いている方はだんだん疲れて来て、それで信者になった人は誰もいないというのです。**

●最近、若い保育士たちが、先輩の保育士の言葉に傷ついてすぐに「辞めたい」と言うのです。そこで私は昼の礼拝の時にこう話しました。「思い煩いはどこから来るのでしょうか。問題があるからですか？問題のある人がいるからですか？問題のない場所や時代はどこにもなく、問題のない人などどこにもいません。問題をなくそうとしても無駄です。問題から逃げてても無駄です。逃げた先にも問題はあります。問題があるから思い煩うのではなく、信じないからです。子どもたちは思い煩いません。失敗しても悩まず、恐れません。それは親を、周りの人を信じているからです。信じることが一番大事です。」北海道浦河町に1984年に設立された「べてるの家」という精神障害などをかかえた当事者の地域活動拠点があります。ホームページにこう書いてあります。「べてるは、いつも問題だらけ。今日も、明日も、あさっても、もしかしたら、ずっと問題だらけかもしれない。組織の運営や商売につきものの、人間関係のあつれきも日常的に起きてくる。」そこを立ち上げた向谷地さんはこういいます。「問題があることを問題としたら、問題のある人は生きれません。問題があっても順調！です。」

ニーチェが「キリスト教徒には喜びがない」と言いましたが、希望を語るのが教会ではないかと思うのです。現実には確かに厳しいかもしれない、お先は真っ暗かもしれない、問題は山積みかもしれない、でも私たちには希望がある、ということ語っていかなければ、誰がキリスト教徒になるのでしょうか。教会が問題ばかりを語って、希望を語らないからおかしくなっているんです。**なぜ問題があっても順調なのでしょう？問題のある世界をキリストが愛し、救うからです。問題のある私たちをキリストが背負っているからです。キリストは悪に負けず、悪から善を生みだされるからです。キリストの言葉は必ず成り、世界は必ず救われます。だから大丈夫、順調なのです。現実だけを見ていたら駄目です。それと同じくらい、神に希望を置くのです。救いはそこから来ます。**